

過去の【今月のコラム】

2020年12月のコラム：会員限定の全国オンライン研修会の報告

「66」

11月22日(日)「第1回子どもの発達を考えるSTの会 オンライン研修会」が皆さんのお力を借りて無事開催されました。みなさま、お疲れ様でした。

さて、「66」の数字の謎は後々紐解いていくとして、先に研修委員たちの「オンライン研修会」までのドキュメンタリーをのぞいていきましょう。

ある日、超新米の私は、ボー然としていました。2020年10月24、25日に東京で開催される予定であった全国研修会が中止になったのです。それでも、実行委員の方々は「こんな時こそ、みんなでつながれる何かを!」と熱い心と



行動力であつという間に「オンラインで何かできないだろうか」と話が進んでいきました。そうして「Zoomを使ってみんなで語り合う機会を作ろう。」「そこからオンラインで研修会につなげていこう」と『語ろう会』と『オンライン研修会』はスタートしました。

さあ、大変です。オンラインです。ネットです。Zoomです。ネット音痴が初めてZoomでつながり、沖縄県、福岡県、徳島県と4名全員が顔を見て話せることにひそかに感動していました。が、打ち合わせが始まったものの何を話しているかよくわかりません……。リーダーシップを持つ先生とZoomやYouTubeをメインで取り組んでくださった先生、気配りと笑顔で研修委員をつないでくれた先生のおかげでサクサクと話が進んでいき、みんなに引っ張って行ってもらいました。

そんなこんなで語ろう会に向けてZoomのホストになったり、グループを好きに移動したり、iPhoneで参加していた私がホストになると、みんなの場所に戻れず宇宙空間に放り出されたり、笑いながら楽しく準備していきました。さらに、研修会の少し前、定員以上の希望者にも見えるようにしたらどうだろうかとYouTubeによる限定配信も決まりました。YouTube設定をしているうちに知らずに世界中に一瞬配信してしまい、練習もかねて打ち合わせしている様子を少しだけ限定配信しました。当日、研修委員がZoomにうまく入れない、YouTubeがうまくいかないのもう一度URLを送信したりなど、トラブルはあったもののどうにかクリアしました。これまで失敗も少なからずありましたが、そのたび「なるほど、勉強になる」と支えてくれたので誰も浦島太郎になりませんでした。

舞台裏でいろいろありつつ、「語ろう会」や「オンライン研修会」を通して、たくさんの人と顔を見ながらつながることができ、みんなどんなことをしてるの?とワクワクし、知識を新しく得たり、大変なことや不安なのは一人じゃなかったと共感しあったりすることもありました。何かできなくなっても、新しい世界が広がり、つながることを知りました。オンライン上でも中川信子先生のお誕生日をみんなでお祝いできたことで、さらに強くつながったのではないのでしょうか。

ところでそろそろ種明かし。「66」の数字の謎は、YouTubeの参加者が「66名」で4時間ずっと減ることなく視聴してくださったことです。すぐに視聴をやめることができるYouTubeを見続けてくださるだけの魅力ある内容であったことの証明だと私たちは思います!最後になりましたが、興味深い実践報告をしてくださった先生方、素敵な講話をしてくださった中川先生、参加してくださった方々、チャットでコメントを寄せてくれた方々、情報を提供してくださった方々、YouTubeで視聴してくださった方々のおかげで、今回のオンライン研修会を盛り上げることができました。心より感謝いたします。

ご参加できなかった方に、心のどこかに住んでいて、必要な時にひょっこり出てきて励ましてくれる中川先生の言葉を贈ります。

「しんどいことがある...にもかかわらず前を向く」

「ゆるゆるがんばる」

2020年12月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 研修担当

2020年9月：お知らせ（コラムの代わりです）

新型コロナウイルス感染症の関係もあり、2か月以上も更新ができず申し訳ありませんでした。
今月は(会員の方へが中心になりますが)お知らせを掲載します。

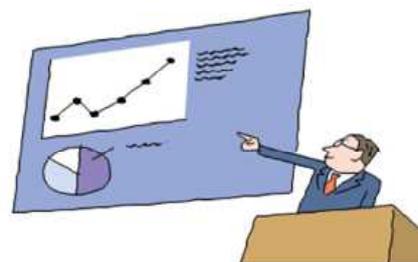
オンライン語ろう会

今年、新型コロナウイルス感染症の影響で、全国研修会の開催が中止となりました。
会員さんからの要望もあり、オンラインで情報交換や交流を計画し、先日第一回が行われ、次の3つのテーマについてお話をしました。

「支援全般」「地域支援」「学校支援」コロナ禍でのSTの業務について

- ・教材のこと
- ・オンライン療育のこと
- ・食べる機能のこと

それぞれのグループで情報交換ができたことだと思います。



参加された方の感想からも

- ・顔が見えての話は、とても良いと思いました。
- ・通常MLだけのお付き合いがより身近になることができました。
- ・地方からでも参加が容易で良かったです。
- ・リアルではまずお目にかかれぬ方と直接お話しをすることができて貴重な体験でした。
- ・和やかな雰囲気できになることを聞けたり、知識の共有ができていたりしてとても有意義だった。

などの反響がありました。

次回第2回語ろう会は9月20日13時~15時に開催します。

また、2020年11月22日には、ZOOMを使って中川信子代表の講演などの研修会も予定しております。

どちらも参加は会員限定となっております。

会員外の方で、このコロナ禍、一人職場で不安な日々を過ごされてみえる方もいらっしゃるかと思います。
これをきっかけにぜひ入会をご検討されてはいかがでしょうか。

訃報のお知らせ

もう1つ、悲しいお知らせです。

「子どもSTの会」の設立当初から関わっていただいた鈴木弘二さまが、8月5日に永眠されました。
74歳でした。

東日本大震災の際には、東北各地に足を運び、行政との折衝、子どもSTの会としての被災地支援のこまごまとした事務作業、被災地ツアーの計画などを先頭に立って実行してくださいました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2020年9月 子どもの発達支援を考えるSTの会 HP担当

2020年7月、8月のコラムは休稿とさせていただきます。

2020年6月のコラム

私は特別支援学校で教員をしています。6月に入り、ようやく新学期がスタートした学校も多いと思います。この2か月の遅れで、いわゆる「詰め込み教育」による子どもたちの負担増を心配する声もあります。ただ、昭和の本当の「詰め込み教育」時代を過ごしてきた私にとって、これは学習内容の量の問題ではないと考えています。

昭和時代もそうでしたが、分かる子にとって量は問題ではなく、むしろ好奇心を元にドンドン新しいことを進めていけるということで喜んでいた仲間もいました。問題なのは分からない子たち。算数で極端な例を書くと、足し算、引き算の分からない子たちにとって、ドンドン進んでかけ算、割り算が入ってくるとしたらどうでしょうか。

覚えなくては行けない量ではなく、分からないことばかりが増えていきます。これはストレスになります。

ストレートに言ってしまうと、これらを解決するには教員の力量が大きく問われるだろうということです。時間的ゆとりがないのでごまかしがきかず、如何にみんなに分かりやすい授業をするかがポイントです。このことは今年度自分自身にもよく言い聞かせながらやっていると、思っています。



さて、算数の話を出したら、思い出したエピソードがあるので紹介します。

私、小学校の算数まではよかったのですが、中学校に入ってから数学が超苦手科目になり、高校時代のテストは毎回赤点。年度末は毎年留年ギリギリでした。これまた昭和は今のような絶対評価(個人内評価)ではなく相対評価(クラス内評価)なので、テストの点数で問答無用に留年となる時代でした。(地域や学校にもよりますが)あるとき、確率の問題で、「サイコロを振ったときに1が出る確率は？」という問題がでました。数学的な回答としては「 $1/6$ 」が正答なのですが、ひねくれ者だった私はこの答えに納得がいかず……。

だって、1がでるかどうかが=1(イエス)かそうでない(ノー)の2択だから、 $1/2$ ではないの?というのが私の答え。

この屁理屈に対し「では実際に振ってみよう」となり、いざ実験。

正確な人数や回数は忘れてしまったので、仮に30人が30回振ったとします。実験の結果はどうでしょうか。限りなく $1/6$ に近い数字が本当に出るのでしょうか?

実際の回答は、たしか $1/4$ ぐらいだったと思います。

不確かな記憶では説得力が無いので、実際に今自分で30回振ってみました。結果、30回中18回も1が出ました。

考えられる理由は大きく3つほど。

- 1.一般的なサイコロは1の穴が大きく、1の面が一番軽いので上に来やすい。
- 2.何度も振っていると、1がでる降り方のコツが分かってくる。

3.30人もいると、インチキをして、実際に出た数より多い回数を申告するものが出てくること。

私の18回は、1を上にして手のひらに載せ、どの程度力で転がせば1が出るか、何度か練習した上で臨みました。

やってみると意外に出せるんですね。

振り返ってみると、アスペルガー症候群のお子さんで、このような自分なりの理屈で物事を考え、理解するお子さん。結構いたかもしれないと思います。そうであるなら単に「この子は分からない」とか「理解ができない」と片づけてしまうのではなく、一生懸命に考えた理屈を踏まえて話をしていかないと平行線のままになる恐れがあります。

気を付けないといけませんね。

最後に一言。数学は苦手ですが、嫌いではありません。むしろ好きです。苦手なものを嫌いとするのは周りの環境次第かもしれません。

なぜ好きかって？

例えば虚数。2乗してマイナスになる数字なんて発想、未知の部分が多く面白いと思いませんか？

好みの対象に違いはあるけれど、分からないことが分かってくる。できなかったことができるようになる。

ここに喜びが生まれるのは皆さん同じだと思いますがいかがでしょうか。

2020年6月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2020年5月のコラム

子どもSTの会では、いつも多くの学びをいただいています。このような貴重な学びの場があることに深く感謝しております。

当方は、ST養成校の学生時代に中川先生の著書に感動し、それ以来15年以上にわたり子どもSTの会にお世話になっています。今回コラム執筆の依頼を受け、正直たいへん驚きましたが、一会員としての思いを書かせていただきます。

わたしは、地方の重症心身障害児(者)施設に勤務しており、施設のSTとして入所されている利用者および外来のお子さんの言語聴覚療法を行なっています。ご存知の通り、入所の重症心身障害児(者)は、日頃から厳重な医療的対応と体調管理が必要です。このため、行動や社会参加がどうしても制限される方がほとんどです。一方、どのような重い障害をもつ方であっても、豊かな生活の質と日々の楽しみを保障されなければなりません。入所の利用者にとってこの時期は、4月のさくらの余韻を感じながら、満開のつつじのもとで利用者と空気の和らぎを共に感じる、猛暑を迎えるまでの貴重なひと時です。また、外来のお子さんにとってもこの時期はライフステージを1歩高める時期です。新しい学校に慣れてくれてよかったとか、新しい先生にうまく配慮していただいてホッとしていますなどの保護者からのお話でこちらの気持ちもほっこりする。まさに風薫るということば通り、あたたかな日々を過ごすはずでした。

新型コロナウイルスでそんな日々は一変してしまいました。

厳重な医療的管理をうける入所利用者にとって、感染症はもちろんど法度。職員は、利用者感染症を移してはならないとの思いで早くから外出を最低限にとどめていました。わたしも、県内の移動は極力控え、他県の用事も全てキャンセルしました。

もちろんマスクや手洗いはいつも以上に念入りに。これだけやれば大丈夫...大丈夫???利用者に関わっている時は普段通りのつもりでも、「自分はもしかしたら感染しているのではないか?目の前の方に病気を移したりしないだろうか?」という不安が頭の片隅から離れません。おかげで毎日緊張感でグッタリ。外来のお子さんに関わっても、これまで感じたことのない違和感を感じました。風邪でもないのにマスクをつけ続けている大人の様子や、自らに降りかかった突然の休園・休校といった状況を、お子さんなりに強く受けとめていることが窺えました。小さくても、ゆっくりさんでも、本人なりのとまどいを強く滲み出していました。保護者も病院にいることへの不安、大声で話し、笑うことそのものへの不安を感じている様子でした。その後、外来を一時制限し、現在は外来を安全に再開する方法を模索しています。

思えばこの1年、「令和」という上品で落ち着いた語感からはほど遠い、激しい自然災害の日々が続きました。台風や大雨による被害が頻発し、東日本に限らず地震が発生しました。そして、このたびの新型コロナウイルスが追い打ちをかけました。「いつでも物が買える、学校で勉強ができる、当たり前に行事ができる、安全に生活が営める」が全国的に当たり前でなくなりました。

過去の感染症のときがそうであったように、必ず「新型コロナウイルス以後」の世界はやってくるでしょう。しかし、浅慮な自分ではその世界がどのようなになっているか、全く想像もつきません。全く別の新しい日常かもしれません。目の前の利用者をどう支えるか。この目標は変わることはありませんが、そのための「常識的な」手段はすこし変わるのかもしれませんが、「新型コロナウイルス以後」に備え、わたしたちは

どう考え行動すべきか。自分ひとりでは考えも及びませんが、同じ立場でともに考えられる子どもSTの会のみなさまとヒントを交換しながら、当会規約第3条にある「自らの力量の向上をはかると共に、支援を必要とする方々へのサービス向上」に精進したいと思います。

2020年5月 子どもの発達支援を考えるSTの会 会員

脱ハラスメントを目指す

コラムを書くことになりました。執筆予定者のピンチヒッターということですが、こういう場合、うまく書けなくてもピンチヒッターなので気軽に書けますね。多少の評判が悪くてもピンチヒッターだから許してね、みたいな甘えが利くわけです。

というわけで、ここ数年私が目指していることをざっくり思うままに書かせていただきます。それは「脱ハラスメント」です。ハラスメントは虐待や虐め、嫌がらせというような言葉で言い表されていますが、私はその本質を「暴力」とみています。勤務している施設でも虐待の通報が自治体があり、より考える機会が多くなりました。私も同僚にハラスメントを受けたと思うこともあります。津久井やまゆり園の植松聖の殺傷事件は有名ですが、あれもハラスメントの一つと考えています。

さて、どうしたら、ハラスメントを無くすことができるかを考えてきました。考えてみれば、50年以上も前の私が小学生の時から、いじめや教師の暴力はありました。体罰はいけないのではないかと、虐めはダメではないかと言われ続けて50年以上にはなるのではないのでしょうか。体罰は学校教育法(1947年施行)11条ですら禁止。児童虐待の防止等に関する法律(2000年施行)、障害者虐待の防止、障害者の養護者に対する支援等に関する法律、(2012年施行)、高齢者虐待防止法(2006年施行)などの法律も作られてきています。にもかかわらず、いまだに暴力やハラスメントはなくなりません。なぜなのだろうと考えているところなのです。

安富歩氏という方はハラスメントが生じたのは「国民国家」という思想があるからではないかと語っています。国家は国民によって形成されるという考え方のようなので、国家の役立つ人間を良い人間とするのでしょう。全体主義的な考え方に支配されてくると個人は組織のために有用か有用でないかということで価値は決まってしまうようです。そういうことで排除が生まれ、ハラスメントに繋がるというのです。戦争はその成れの果てですね。ナチスドイツで行われたホロコーストでは600万人とも言われる人々が命をなくした悲惨は超有名です。そういう思想が現代の世界中の人々の中に根付いているというのです。日本の社会でも例にもれずに、ですね。

個々人の思想や良心の問題でハラスメントが生じているとすると、さて、どうしたものかと、行き詰まってしまう。ハラスメントをしている人にぶつかっていけば暴力合戦になってしまうこともあり、注意するのも怖い。現代社会ではやっぱり脱ハラスメントは無理か、ハラスメントを受けやすい障害者はびくびくしながら生きていけなくちゃいけないのかとやるせない気持ちになってしまいます。

最近、コロナウイルス騒動で家にいる時間が多くあります。それで、東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」の作詞者でもある岩井俊二監督の映画を立て続けにみています。彼の映画は人々の幸せがテーマにあると思いますが、その中にはなんとも避けられない暴力的な世界に生きる人々の織りなす深い闇も同時に描かれているように思います。社会の暴力やハラスメントの残酷な面を描いていてそれを私たちにこれではいけないのではないかと問っている作品が多いように思います。私の見た映画は「打ち上げ花火」「花とアリス」「Love Letter」「リップヴァンウィンクルの花嫁」「スワローテイル」「リリィ・シュシュのすべて」などですべてフィクションです。フィクションですから救いはあります。現実の問題ではないということで済ませ

れます。しかし、岩井俊二は暴力やハラスメントを避ける道を見出しているのではないかと私は思いました。彼は私たちに訴えているように思います。「暴力やハラスメントは人を不幸にするよ。かわしていけ、暴力やハラスメントに対してはかわしていけ、俺はこうして映画でかわしていくよ」みたいに、です。そして、彼の視点は常に当事者視点なのです。特にハラスメントを受けている人、どうにも逃れることができない犠牲者の視点から映画を作っているように思いました。

さて、私自身はどうしたらよいか。自分は暴力やハラスメントをしない、相手を含め人々が暴力やハラスメントしないように通報したり、職場では脱ハラスメントの必要性を感じている人と共に職場の長も巻き込み研修をしたり、環境を整えていくことなどが私には似合っているようです。非暴力や脱ハラスメントの世界が小さな範囲かもしれませんが、この世に造っていけるように思います。あるいは、すでにある、非暴力や脱ハラスメントの世界を続けてゆけるのではないかと、そして、満ち足りる暮らしに至れるのではないかと思うのです。

私事ですが、36年前宮城教育大学障害児教育教員養成課程(1年課程)の入試に「言語障害についての臨床的見方について書け」というような小論文が出されました。どう書いたかももう忘れましたが、この「臨床的見方」(言語障害者当事者の理解を重視するという見方とように私は学びました)ということが、私の世界観を変えたと言っても過言ではありません。ハラスメント社会をこのような臨床的見方で捉え、脱ハラスメントを実践していきたいと思っています。

最後に最近知人の言語聴覚士ご夫婦と2歳11カ月のお子さんにお会いしました。60歳2カ月のおじさん(おじいさんか(^^;))が遊んでいる場面をユーチューブにアップしました

(<https://youtu.be/hwsKsBeBRiY>)。ご両親から了解はいただいています。ご覧になりコミュニケーションの取り方などをご指導下さい。まあ、こういう時は、私にとっての脱ハラスメントの世界ではないかと思う時なのですけど。あっ、それから脱ハラスメント活動は裏を返せば幸福模索活動の一つとも私が思っていることを加えておきます。



2020年4月 子どもの発達支援を考えるSTの会 会員

受験について



発達障がいのお子さんを持つ保護者さんからの相談で意外と多いものとして「中学でも支援級を使ったら全日制への高校受験ができないのでは・・・・・・・・?」と中学校の学籍選びに関する内容があります。

地域や学校の体制によって差はあると思いますが、原則として支援級に在籍しているから全日制高校を受験できないという枠組みはありません。ただ、受験するお子さんが少ないのは事実かな?という印象があります。

(中学1年生で支援級に在籍していても全日制高校へ進学するために退級を勧めていくケースもあります。)

今回はコラムを書く貴重な機会を頂いたので、発達障がいのお子さん方の高校受験について経験談や当放課後等デイサービスでの取り組みを書いていければと思っています。

小学生までは支援級に在籍するお子さんも多いものの、中学校進級の際に通常級に籍を置く方が当事業所の地域では多いかな?という印象があります。いろいろな理由があると思いますが、お子さん自身が“みんなと違うことをしたくない”と支援を拒むケースも中にはあります。思春期の難しい時期なので親の意向だけで決めることが出来ない時期だなあ~と感じることは中高生を支援していてよく感じることです。

中学校へ入学すると小学校とは違って、授業時間が長くなったり、教科担任制に変更され、勉強内容も難しくなったり・・・・・・・・など、一気に本人へ課せられるハードルが上がってきます。そんな環境変化の中、通常級ではサポートが得られにくい環境になるので、お子さん方は疲れてしまうこともしばしばあります。

私は事業所を立ち上げて、一番初めに会った受験生に受験をサポートする重要性を教えて頂きました。当事業所は開設したのが12月なのですが、その受験生は12月に受験勉強をしていると言って英単語を教科書と同じフォントで見事に書き写していました。「え、それ受験勉強!?’と内心焦ったのを今でもよく覚えています。

よくよく考えてみると、受験勉強とはどんなものか?という定義から教えてくれる先生は数少ないですね。

「そんなことわかっていて、当たり前だろう.....。」大抵の大人はそう思うと思います。

発達障がいや自閉スペクトラム症のお子さん方にとって、暗黙の了解がわかりにくいお子さんは多いと言われています。一番初めに会った受験生も受験勉強とは、どんなものなのかがわからないまま、周囲からは「受験勉強しろ!」と言われ、自分なりに受験勉強をしていたのです。

その翌年から受験生のサポートを強化しなければ.....と取り組むようになりました。

今まで5年間で50名の高校受験に伴走してきました。今年も15名のお子さん方が高校受験を控えています。受験生サポートの体制が整った今では、中学2年生の2月頃から受験BOOKを片手に活動を始めていきます。中3は、中1・中2と違ったスケジュールになるという見通しを伝えるために中3の何月にどんな出来事があって、何をしないといけないのか?などを細かく伝達しています。

なぜオープンスクール(高校体験)に行くのか?どの高校を選択すればいいのか?〇〇高校ってどんな学科があるのか?などの高校の情報集めもサポートし、自己選択を促していきます。

当県では基礎学力テストという高校入試の指標になりやすいテストがあるのですが、なぜ基礎学力テストを

受けるのか?普段のテストとどう違うのか?という意味を伝え、どの教科をどのように勉強するか?や、テスト当日のやり方のコツを伝えたりと、テストに向けて勉強の計画を立てます。

秋ごろからは面接試験に向けての練習を始めていきます。質問応答にどのように答えるか、作文を考えるとこころから始まり、面接作法の練習、全体を通しての練習、自己評価と他者評価を含めた振り返り……。振り返りが苦手なお子さんには動画を撮影し、自分で見て振り返るなど練習を重ねていきます。

またプレ受験という受験当日の模擬体験ができるよう普段活動している事業所から場所も職員も変え、新規場面でも筆記試験と面接試験ができるか練習をしています。

受験がよいよ近づき「不合格になったらどうしよう……」と不安になるお子さんも多いのでメンタル面のケアや受験へのモチベーション管理も1人1人に合わせて対応が取れるよう工夫しています。

当日の持ち物確認リストも準備して、お子さんに自宅で確認をしてもらうようにしています。

受験の時期と はある意味、目標設定がしやすく、本人・保護者・学校と一丸となって連携が取りやすくなる時期だな~と思っています。

本人にとっては、今までのコミュニケーション態度を見直す機会になったり、自分の苦手なことと向き合う機会になったり……。

私が一番大事だと思っているのが、多少のストレスと付き合いながら日々の課題をこなしていく練習になるのが受験生の時期だなあということです。

高校生や社会人になっていく中で、ストレスが無い状態はほとんどないので、ストレスと上手く付き合う方法を身につけておくことが重要だと感じています。

そのため受験生になる保護者さんや本人達にも「この一年は耐え忍びながら、一緒に受験を乗り越えていこう」と話しています。

本人や保護者さん方にとって耐える時期である受験を乗り越え、高校生になったお子さん方は晴れ晴れとし、今までよりも成長したなあ~と感じることが多くあります。

お子さんや保護者さんと苦難を乗り越えたからこそ、卒業のときに感慨深いものがあるなあと卒業生への色紙にメッセージを書きながら、しみじみしています。

※この本文の「支援級」は、「特別支援学級(在籍)」を示しています。

また、本文の内容について全国レベルでみた場合、かなり地域によって違いがあります。

どうぞご了承ください。

2020年3月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2020年2月のエッセイ

「地図を燃やす」



8月になると松本は、SEIJI・OZAWA・MATSUMOTO・FESTIVALで音楽の街になる。

音楽総監督は小澤征爾氏。世界のオザワとして有名なクラシック音楽界の巨匠である。フェスティバルは世界中から優秀なプレーヤーが松本に集まる、何とも贅沢なものである。モーツァルト、ベートーベン、ブラームス、マーラーなどの交響曲、そして超一流のソリストを招いての協奏曲や現代音楽まで多彩なプログラムが組まれる。

近年は高齢と病気のため小澤氏の姿を見ることは少なくなったが、数年前に聴いた小澤氏が指揮するオーケストラの響きは、彼の才能とエネルギーと、曲に込められた作曲家の魂がぶつかり合う中で、新しい息吹を得た「命あるもの」として会場中に拡がり、立ち昇り、天井を突き抜け、天空に昇るかと感じるものであった。その当時、小澤氏は実に御年81歳。

凄いのである。

まだ、ボストン交響楽団の音楽監督としてバリバリやっていた頃、小澤氏はノンフィクション作家の沢木耕太郎氏との対談でこう語っている。

「三十まではなんでもできると思っている。ところが三十すぎると自分に可能なことが、地図のようにはっきり見えてくるのですよ。」

多くの日本の若者を世界放浪へ突き動かした(私も突き動かされた一人だが・・・)『深夜特急』の著者である放浪する作家、沢木氏は、その言葉をとても面白く感じる。

沢木氏の短いエッセイは「脳裏に浮かぶ地図を、どうしたら燃やし尽くせるのだろう。」という言葉で終わっている。

「地図を描き、燃やし尽くす」

この言葉を自分に引き寄せて考えてみる。

沢木氏の本や小田実の海外放浪の本に触発され、そして海外の障害児者施策を見てみたいという思いも重なり、海外に飛び立った23歳の私は、確かに、何でも出来る、無限の道を選ぶことができる、地図を持たない旅行者そのものであった。

その後30代に入り、勤務していた病院を辞めて飲食店経営をしながら障害者雇用創出を模索する中で、既存のシステムにはない、自分がやることを運命づけられているとしか思えないことが『地図』として見えてきた。

地図の先にあるのは、暮らす地域で、人とのつながりの中で、今を喜び、将来にワクワクする子どもや保護者の姿である。「生きるって素晴らしい!」子どもも保護者も家族も心からそう思うことができる、それが終着点だ。

それは誰も描いたことがない、自分にしか描くことができない、私だけの『地図』だ。

やがて40代を越え50歳を過ぎて、児童発達支援事業所を運営するようになった今も、本当に少しずつではあるが、熱を帯びた炎が30代に描いた地図をジリジリと燃やしているという感覚はある。

スピードは気にしない。生きていれば、諦めなければ、地図は燃やし続けることができる。

現在、私の活動フィールドは言語聴覚士のフィールドからはかなりはみ出したものになっているが、核となるアイデンティティは言語聴覚士である。

言語聴覚士という仕事は、言うまでもなくコミュニケーションを専門とする仕事である。そして、ハーバード大学の長期間の調査で証明されたように、コミュニケーションは『幸せ』と強い相関関係がある。

言語聴覚士は、とてもいい仕事である。コミュニケーションというキーワードで、幸せを感じてほしい人を思い浮かべ、想像力を働かせながら動き回れば、様々な人や世界とつながることができる。新しい世界に出会い、オリジナルな仕事や人生をつくっていくことができるのだ。

言語聴覚士はコミュニケーションの仕事を通じて人の幸せにコミットする。

言語聴覚士が、対象とする子どもや家族の幸せを目標に、それぞれ自分だけの「地図」を描き、燃やすことができたなら、世の中はきっと1歩も2歩も良い方向に向かうのではないかと私は思っている。

地図の目標は何か?どんな地図を描くか?それを燃やすエネルギーはあるか?地図を燃やすエネルギーを持ち続ける意志があるか?

それぞれの描いた地図を共有し、その進展状況を確認しあい刺激しあう、この子どもSTのネットワークがそんな場になれば本当に嬉しい。

2020年2月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2020年1月のコラム

"集団の中でのさりげない配慮"

先日、ある幼稚園の公開保育があり、3歳児さんのクラスを見学しました。いつもながら、いろいろなお子さんがいて、ほんとうにおもしろくて。その中のひとり。ぼーっとしてなかなか朝のお仕度が進まないAくん。先生はさりげなく、声をかけます。

「帽子をかけようね」。

間をおいて「(連絡帳に貼る)シール、選べた?」

また間をおいて「シール貼れたかな?」など。

「あーあ、Aくんったらまたぼーっとしてる!」ではなく、叱るでもなく、注意するでもなく、実にさりげない応援を受けて、お仕度は"遅々として"、でもちゃんと進みました。

別の日、ある保育園の3歳児クラスを見学しました。

お子さん用のテーブルには、坐る位置の目安が色テープで示してあります。

「一列に並んで先生のお話をきく」ための位置の目安として、床にテープがまっすぐに貼ってあり、ひとり分のスペースごとに横の刻みもさりげなく示されていました。

「朝のお仕度」や「お外から帰ってきたら」何をすればいいかの手順をA4の大きさのパウチしたカードにして下げてあり、分からなくなった子はそのカードを適宜参考にして順々にお仕事を片付けて行きます。

「構造化しています」ではなく、さりげなく。

折り紙でクリスマス飾りを製作するのが本日の課題でした。ちょっと難しい折り方。

先生が前でお手本を示します。

分かりやすい言い方で、しっかり見せながら説明します。

Bくんは、じーっと説明を見て、聞いていました。

先生が「さあ、ではみんなもやってみよう」と言い終わらないうちに、Bくんたら「どうやってやるの?」と大きな声で質問しました。

見ていた私は、「あ~あ」と思いました。

「今説明したよ」とか「よく聞いててね」とか「聞いてなかったの?」とか、いやみ(?)というか、小言が出やすい場面だからです。

ところが先生はさらっとこう言いました。

「やってみてね。分からなかったらお助けにいくよ」。

そして、Bくんの横にいた加配の先生(多分)が、さっとBくんの方を向き、色紙のお手本を見せながら、やり方を教えてあげていました。

クラスには他にも「わかんないよー」とか「できない」って大きな声で言っている子がいました。そのつど先生方が「お助け」についていました。

「分からない」「できない」って態度でしめしたり、ことばで言ったりすれば必ず分かってもらえる、助けてもらえる。

そんな「安心感」の中で育つことが、人生を生きて行く上での大切な基礎になる。

そのことを再確認しました。



「療育とはていねいに(注意深く)配慮された子育てである」は、故・高松鶴吉先生(元北九州療育センター長)の有名なことばです。

「特別な支援が必要な子だから」「障害があるから」から出発するのではなく、「この子はどういう風に接したら安心して自分の力を伸ばせるのか? 取りくもうという気持ちを起こしてくれるのか?」と、子どもの側に立ったていねいな配慮。

特別な所に通って特別な支援や訓練を受けることから一歩進み、生活の場である園でのさりげない、でも療育的意味のある配慮が当たり前に行われる日が確実に近づいている、そんな気がして、何だかうれしい気持ちになった二つの園見学でした。

STは、ともすると「特別な支援」や「訓練」に職種としての存在価値を見出す傾向が強いですが、生活の中での支援について、もっと視野を広げる必要があると思います。

世界は確実に変わりつつある、STも井の中の蛙であってはならない、そう、自分に言い聞かせ、周りにも伝えたい。それが新しい年の課題です。

2020年1月 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表